

終末期がん患者の呼吸困難に対する 望ましいケアに関する研究

山本 瀬奈*

サマリー

本研究の目的は、終末期の呼吸困難に対して緩和ケア病棟で提供されたケアの実態と遺族の評価を明らかにすることである。緩和ケア病棟で亡くなったがん患者の遺族 995 名に質問紙を送付し、回答応諾が得られた 533 名のうち呼吸困難を体験した患者の遺族は 231 名であった。終末期の呼吸困難に関して患者

へのケア（15 項目中 14 項目）、家族へのケア（4 項目すべて）は 60% 以上の遺族が実践されていたと回答しており、複数のアプローチを活用したケアが実践されていることが示された。終末期の呼吸困難に対するケアについて遺族の評価は総じて高く、患者の呼吸困難の強さによってケアの評価に差はなかった。

目 的

がんの終末期において呼吸困難は頻度が高く、死亡前の短期間で増悪する^{1,2)}特徴をもつ患者・家族にとって苦痛を伴う症状の 1 つである。呼吸困難の効果的な緩和には薬物療法と非薬物療法との併用が必要と言われ、ケアの標準化が求められている。

本研究では、終末期の呼吸困難に対して緩和ケア病棟で提供されているケアの実態とそれらに対する遺族の評価を明らかにすることを目的とした。

結 果

緩和ケア病棟で亡くなったがん患者の遺族 995 名に質問紙を送付し、646 名より返送を得た（回収率 64.9%）。そのうち、質問紙への回答応諾が得られた 533 名を解析対象とした（回答応諾率 53.6%）。緩和ケア病棟入院中に呼吸困難を体験していた患者の遺族は 231 名（45.5%、無回答 25 名を除く）おり、遺族が認識していた患者の呼吸困難の強さは「とても息苦しそうだった」73 名（31.6%）、「息苦しそうだった」76 名（32.9%）、「少し息苦しそうだった」69 名（29.9%）、無回答 13 名（5.6%）であった。なお、酸素療法を受けていた患者は 165 名（71.4%）、受けていなかった

*大阪大学大学院 医学系研究科 保健学専攻

患者は46名(19.9%)と報告された(20名は酸素療法の有無不明または無回答)。

1) 呼吸困難を体験している終末期がん患者と その家族に提供されたケア

呼吸困難に対する患者へのケアを15項目挙げ、それらが緩和ケア病棟入院中に提供されたかどうかを4件法で調査した(図1)。「あてはまる」「少しあてはまる」の回答を合わせると、15項目のうち14項目が遺族の60%以上によって実践されていたと報告された。特に、「身体の位置や体勢、向きを工夫してくれた」、「息苦しさをたえず気にかけてくれた」、「息苦しさからくる患者の不安や恐れを聴いてくれた」の3項目は共通して提供されていたケアであった。また、呼吸困難のある患者の家族に対して緩和ケア病棟で提供されたケアを4項目で同様に調査したところ、家族へのケアも62.8~73.6%の遺族が実践されていたと認識していた(図2)。

2) 終末期の呼吸困難に対するケアに関する遺 族の評価

緩和ケア病棟入院中の呼吸困難に対するケアについて6項目の設問により遺族の評価を調査した(図3)。全項目に「あてはまる」と回答した遺族の割合は38.6%に上った。これら6項目についてクロンバックの α 係数を確認した後($\alpha=0.921$)、各項目の得点を加算し、クラスカル・ウォリス検定を用いて患者の呼吸困難の強さによって合計点を比較したが、群間に有意な差はなかった($p=0.323$, 図4)。

考 察

今回調査した終末期の呼吸困難に対するケアは全体として高い割合で実践されており、緩和ケア病棟では複数のアプローチを活用して呼吸困難のケアが実践されていることが示唆された。ケアの内容としては、①安楽な体位を工夫すること、②呼吸困難に常に注意・関心を払うこと、③患者の不安や恐れを聴くことが広く共通して実践されて

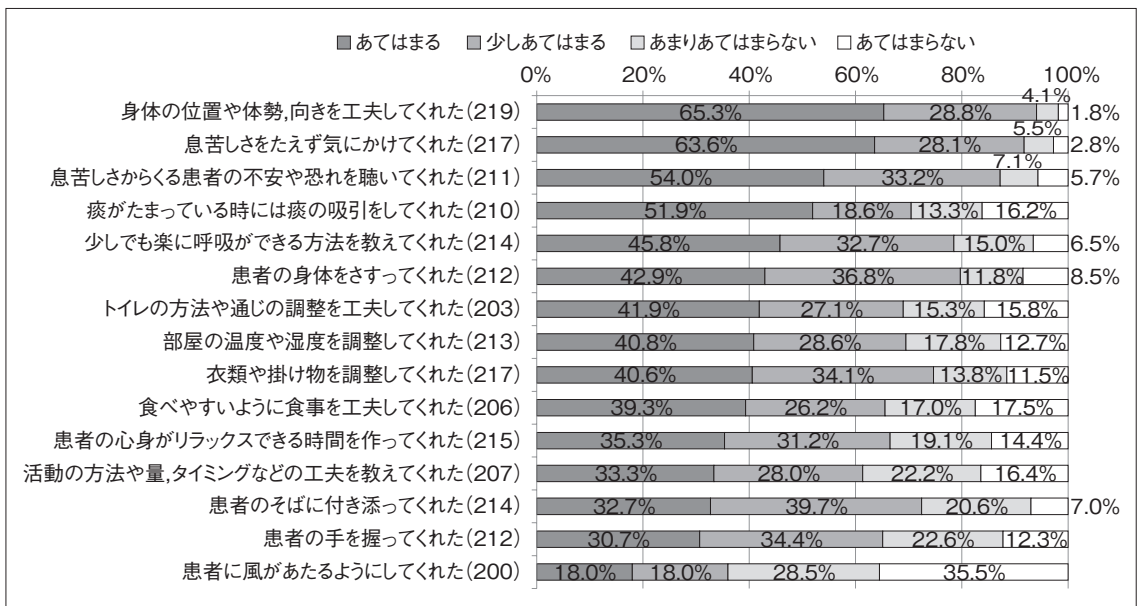


図1 呼吸困難を体験する終末期がん患者に提供されたケア

質問は「息苦しさがあるときに」「息苦しさを和らげるために」などの言葉を添えて行った。()内は各項目における回答数。

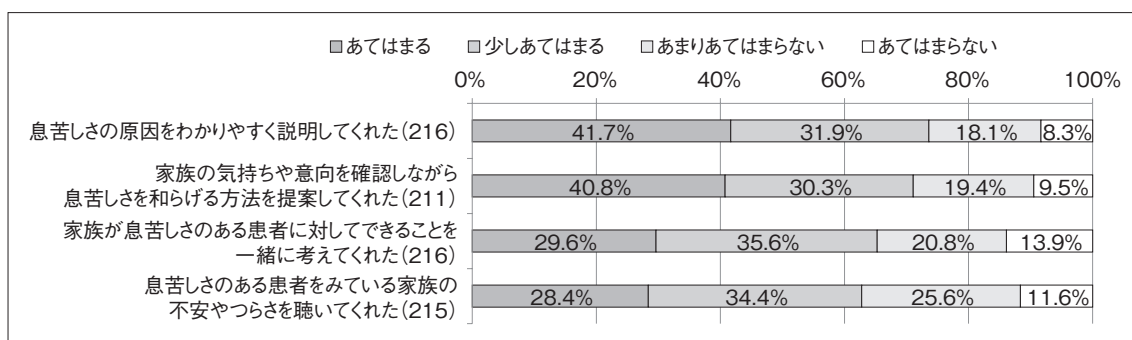


図2 呼吸困難を体験する終末期がん患者の家族に提供されたケア
() 内は各項目における回答数.

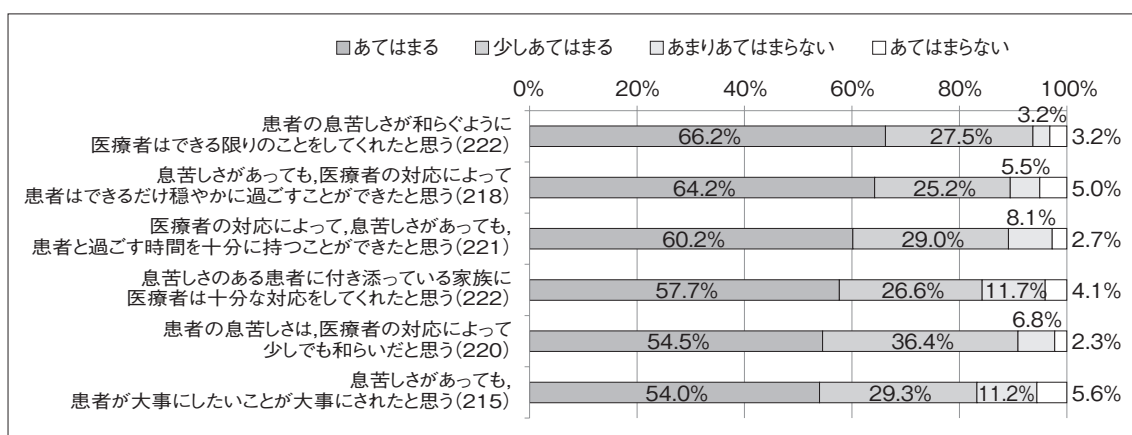


図3 終末期の呼吸困難に対するケアに関する遺族の評価
() 内は各項目における回答数.

いた。医療者はこれらのケアを中心に据えながら患者の心身の状態や活動・生活の状況、個人の選好などに応じてケアを組み合わせ実践していたと考えられる。家族へのケアに対する回答では患者へのケアが家族の気持ちにも配慮しながら提供されていたことがうかがえ、家族を交えたケアが展開されていることも明らかになった。

このように実践されたケアは遺族に高く評価されており、今回調査に回答した遺族にとっては、多くの場合、望ましいケアが達成されていたと推察される。重要な点は、遺族の評価が患者の呼吸困難の程度によらず一貫して高かったことである。強い呼吸困難があったとしても、医療者の工

夫によって望ましいケアの実現が達成できる可能性があることが期待される。ただし、あくまで回答が得られた遺族の評価であり、より高い評価が反映されている可能性があることに留意する必要がある。あわせて、本研究は日本ホスピス緩和ケア協会の会員である緩和ケア病棟を対象を限定した調査であり、国内全体の実情とは一致しない可能性も考えられる。

まとめ

緩和ケア病棟では終末期の呼吸困難に対して常に注意が払われ、体位の工夫や心理的支援を基本としながら患者・家族双方に配慮したケアが実践

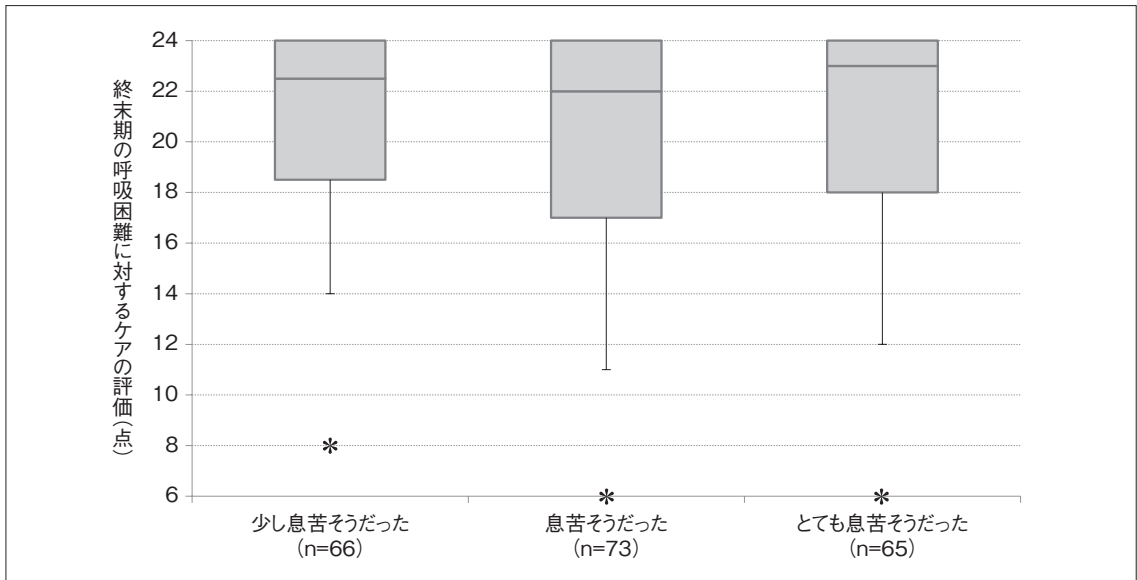


図4 遺族からみた終末期がん患者の呼吸困難の強さと呼吸困難に対するケアに関する遺族の総合的評価
終末期の呼吸困難に対するケアの評価6項目について「あてはまる」4点, 「少しあてはまる」3点, 「あまりあてはまらない」2点, 「あてはまらない」1点として6項目の合計点を算出し (範囲: 6 ~ 24 点), 得点が高いほど遺族によるケアの評価が高いとみなした。グラフは四分位数を用いて作成。ただし, 四分位範囲の1.5倍を超えて第一四分位数より小さい値は外れ値として「*」で示した。

されていた。強い呼吸困難を体験していた患者の遺族も、終末期の呼吸困難に対して受けたケアを高く評価していた。

life among cancer patients admitted to acute palliative care units. *J Pain Symptom Manage* 2015 ; 50 : 488-494.

文 献

- 1) Seow H, Barbera L, Sutradhar R, et al. Trajectory of performance status and symptom scores for patients with cancer during the last six months of life. *J Clin Oncol* 2011 ; 29 : 1151-1158.
- 2) Hui D, dos Santos R, Chisholm GB, et al. Symptom expression in the last seven days of

〔付帯研究担当者〕

荒尾晴恵 (大阪大学大学院 医学系研究科) 青木美和 (大阪大学大学院 医学系研究科) 森 雅紀 (聖隷三方原病院 緩和支援治療科) 森田達也 (聖隷三方原病院 緩和支援治療科)